



日本「アジア英語」学会 ニュースレター

No.2 (Apr. 1998)

《第2回全国大会 神戸商科大学で開催》



《本名信行氏 特別講演》

1月31日(土)、神戸商科大学三木記念講堂において第2回全国大会が催されました。200名を越す参加者で大盛況でした。朝日新聞の2月6日付の文化セクションにも記事が掲載されました。

第2回全国大会プログラム

テーマ：アジアにおける英語の普及と変容
日 時：1998年1月31日(土)
10:00~16:50
会 場：神戸商科大学 三木記念講堂
(神戸市西区学園西町8)

- 9:30 受付
大会総合司会：大原始子
(大阪成蹊女子短期大学)
- 10:00 開会の辞：末延岑生
(神戸商科大学)
- 10:20-10:40 総 会
- 10:40-12:00
特別講演：本名信行(青山学院大学)
「英語の国際化と多様化」
- 12:00-13:30 昼食休憩
- 13:30-14:50 研究発表
司会：橋内武(桃山学院大学)
1. 「アジアの学生の英語教育についての意識調査—シンガポール」
高橋美由紀(中部学院大学)
 2. 「ナウル人はなぜ中国ビジンを話すか」

- 岡村 徹(帝塚山学院大学)
15:00-16:20 研究発表
3. 「アンケート調査から見たフィリピン大学生の言語生活と言語態度」
河原 俊昭(金沢経済大学)
 4. "Expanding the Horizons—An Analysis of the Official English Textbooks of China"
Jie Shi(国際基督教大学)
- 16:20 閉会の辞：森住衛(大阪大学)
17:00 懇親会：於 神戸商科大学
生協喫茶「ビオール」

大会をふり返って

森住衛(大阪大学)

有意義な一日であった。「山椒は小粒でもびりりと辛い」大会になるだろうと予想していたが、その通りとなった。なぜそう言えるか。志を同じくする者が一同に会し、何かを訴えたい、世の中の欠落している部分を埋めたいという意気が出ていたからである。その意気がどのように出ていたか。

まず、末延岑生氏(神戸商科大)の開会の辞である。わかりやすいことばでNative English(es)ではなくNon-native Englishesに自信と愛着を持とうと呼びかけた。直接の経験から出た信念だけに説得力があった。

続いては総会。田嶋ティナ宏子氏の提案で、日本「アジア英語」学会という名称に変えた経緯、会則の承認などがあった。本学会の目的は「アジアおよび太平洋地域における英語の普及と多様性に関する諸問題を調査・研究すること」になった。その説明の際に「また、この成果を何らかの施策にも映していきたい」と氏が付け加えたのに「いいネ」とつぶやくと同時に「これは大変ダ」とも思った。本学会が扱って立つ学問分野は社会言語学ないしは言語社会学である。単に調査・研究しているだけでは済まないのだ。

本名信行氏(青山学院大)の特別講演「英語の国際性と多様性」でも多くの「気づき」

や確認があった。英語に限らず言語の普及には変容が伴うという大前提、単一の規範にcode switchingするのではなく多様な規範にcode mixingしなければならないこと、これまでの英語教育は同化政策に支えられていたが、これからは単にコミュニケーションの道具にすぎないこと、英語は今や多国籍、多文化、多機能、多形式になっていること、等々である。これで学会の理念は確立した…カナ。

午後のセッションは橋内武氏(桃山学院大)の司会で研究発表4本があった。高橋美由紀氏(中部学院大)の「アジアの学生の英語教育についての意識調査—シンガポール」は、「英語帝国主義」の洗礼を受けた上でのこの種の研究なので信頼できた。発表の中で「(英米の英語に対する)傾きの精神構造の是正」という言い方にうなずいたのは私だけではないだろう。岡村徹氏(帝塚山学院大)の「ナウル人はなぜ中国ビジネスを話すか」は、ナウルという南太平洋の「小さな国」を取り上げてくれたこと自体が嬉しい。最後に、この国が近い将来に温暖化で海に没してしまう前に資料を収集しておきたい旨が述べられた。もし氏が時間に追われていなかったら、「また、ナウル国が没しない術を、ナウル人がビジネスを失わない術も合わせて考えていきたい」と加えていたに違いない。河原俊昭氏(金沢経済大)の「アンケート調査から見たフィリピン大学生の言語生活と言語態度」では、フィリピン英語に対して誇りを持つ者が31%近くいる反面、アメリカ英語に憧れている者も20%いるという報告があった。日本人学生のうち日本英語に誇りを持っているのはわずか7%だそう。本学会が存在する由縁はここにある。理事長をはじめ会員の英語が「うまい」などと言われたら「恥ずかしい」と思わなければならない。

Jie Shi氏(ICU)の「Expanding the Horizon—When “West” meets “East”?’は、中国の中等教育で使われている教科書の分析もさることながら、英語が持っているイデオロギーに「学ぶ」側がいかに対処するか、日本は英語化されていないかという警鐘として聴いた。

最後の閉会の辞は私が担当した。各セッションを概観したあとに、「調査される側の論理を考えよう」とか「日本英語のモデルを出そう」などとく言うは易く行なうは難し)のことを自己批判的に述べた。理事の一人が「今回の閉会の辞のように講演や個々の研究発表の内容に触れるのもいいね」と言ってくれた。ここまで書くと、本稿の副題に「独善的」と加えなければならない。

本名信行氏特別講演Review 本名「英語普及論」

源 邦彦
(青山学院大学大学院)

本名氏の特別講演「英語の国際化と多様化」の概要は以下のとおりである。

英語の今日的な国際化と多様化を理解するには、一国家、一民族、一言語という考え方を改め、アジア英語研究の視点をcode-switchingからcode-mixingに移す必要性がある。例えば、この視点からインド英語、シンガポール英語を見ると、各国の文化及び特有の社会的必要性に根ざした多様な言語であることがわかる。つまり、アジア英語は多国籍、多文化、多機能、多形式言語と定義できる。アジアで英語を用いることは、母語話者の文化パターンに同化することではなく、非母語話者独自のパターンで自らの思想と文化を伝達することなのである。これは、日本社会にとって英語が、他のアジア諸国と同じように、その多国籍、多文化、多機能、多形式使用の結果から生じた多様な言語であることを意味し、学習の結果生まれた日本英語は、その多様性の一部として認められなければならない。

これまでの言語研究は、主として国民国家という政治制度を基盤に確立した言語を研究対象としてきた。言語がいかに恣意的な産物であるか、つまり国民国家の成立、あるいは何らかの歴史的、社会的必然性から言語政策等によって操作されてきたことを見逃しているふしがある。見方によっては、「何々語」という存在すらある意味で「想像」の産物であるとも考えられる。そして、言語は常に純粋性、単一性という視点から定義され、本来それが持つ混種性、多様性が見過ごされてきた。

言語間の明確な境界線を前提とするcode-switchingではなく、言語が本来持つ雑多性を示すcode-mixingの視点からアジア英語を研究していくべきだという本名氏の主張は、英語、ひいては言語そのものの理解を促す点で大変有意義である。なぜなら、各々の社会状況に応じて発展した多様な英語は、まさにcode-mixingそのものであり、つまりは言語としての正当性を持つことになるからである。それは、各英語が表現様式として独自の文化パターンを持つことも意味する。また、言語本来の姿を振り返ることから英語の国際性を捉え、各社会特有の社会的必然性から生じた多様な英語を定義付けていくことに、日本の英語教育問題解決の糸口が隠されていると言えよう。

日本「アジア英語」学会 会 則

第1条：(名称)

本会の名称は日本「アジア英語」学会
(The Japanese Association for Asian
Englishes) とする。以下、本会と記す。

第2条：(目的)

本会は、アジアおよび太平洋地域における
英語の普及と多様性に関する諸問題を調査・
研究することを目的とする。

第3条：(事業)

本会は、前条の目的を達成するため、次の
事業を行う。

1. 全国大会の開催
2. 国際会議の開催
3. ニュースレター及び紀要の発行
4. その他本会の目的を達成するために適
当と思われる事業

第4条：(会員)

第2条の目的に関心を持つ者ならば誰でも
会員になることができる。本会の会員は、正
会員、学生会員とする。

第5条：(会費・会計)

会員は、会費を納入するものとする。金額
は理事会が提案して総会において審議決定す
る。本会の会計年度は毎年4月1日に始まり
翌年3月31日に終わる。

第6条：(役員)

本会に理事長1名、理事若干名をおく。

1. 理事長は、理事の互選により選出され、
会務を統括し、会長として本会を代表する。
2. 理事は、暫定的に発起人と発起人が推
薦した者をあてる。その間、選挙規定
などを準備する。

第7条：(総会・理事会)

本会に総会、理事会をおく。

総会は、正会員、学生会員をもって組織し、
本会の議決機関として本会の事業及び運営に
関する重要事項を審議決定する。

理事会は、理事長及び理事をもって組織し、
第3条に定める事業並びに収支予算及び収支
決算に責任を負い、執行の任に当たる。

第8条：(事務局)

本会は、事務局を青山学院大学内におく。

第9条：(改正)

本会則は、総会出席者の3分の2以上の同
意を得て改正することができる。

附則：この会則は、1998年(平成10年)

1月31日の日本「アジア英語」学会第2会
全国大会の総会において制定し、その日より
発効する。

Constitution of The Japanese Association for Asian Englishes

I. Name

The name of the organization
shall be The Japanese Association
for Asian Englishes, hereinafter
referred to as JAF AE.

II. Purposes

The purposes of JAF AE are to
investigate various issues involved
in the diffusion of English and its
diversification in Asia and the
Pacific.

III. Activities

In order to fulfill the purposes
stated above, JAF AE shall

1. hold national meetings,
2. sponsor international conferences,
3. issue newsletters and journals, and
4. carry out other activities
appropriate for the association.

IV. Membership

Membership shall be open to
those interested in the fields stated
in Article II. There shall be two
general categories of membership:
full member and student member.

V. Dues

Members must pay dues. Dues for
members shall be proposed by the
Executive Board and approved by a
majority vote of the General
Meeting. JAF AE's financial year shall
begin on April 1 and end on March 31.

VI. Officers

JAF AE shall have Chief Executive Officer and several Executive Officers forming an Executive Board.

1. The Chief Executive Officer shall be elected from among the Executive Officers. The Chief Executive Officer shall take general responsibility for the management of the association and represent the association as President.
2. The Executive Officers shall provisionally be initial organizers of the association and those who were recommended by them. During this provisional period, the Executive Officers shall prepare a set of election rules for the association.

VII. General Meeting and Executive Board Meeting

JAF AE shall have General Meetings and Executive Board Meetings. The General Meeting shall be organized by both full members and student members. It shall deliberate and decide upon important matters concerning activities and management of the association.

The Executive Board Meeting shall consist of Chief Executive Officer and Executive Officers. It carries out the activities stated in Article III and takes responsibility for budgetary matters.

VIII. Headquarters

The Headquarters of JAF AE shall be located at Aoyama Gakuin University.

IX. Amendment

This Constitution can be amended by approval of two thirds of the participating members at a General Meeting.

Supplementary Provision

This Constitution shall go into effect with approval of the General Meeting held in conjunction with the 2nd National Meeting on January 31, 1998.

書 評

『インターネットは バーチャルな異法地帯』 *Virtually Real: Internet and Self in the Digital Age*

グレン・サリバン著

(The Japan Times)

—インターネットの初級・中級者
向けのわかりやすい「理論書」—

この本はいわゆるハウツー本ではない。どちらかと言えば、ある程度インターネットになじんだ人が、知識の整理をし、理解を深めるための「理論書」である。一方、インターネットの初心者や未経験者が、インターネットについて大ざっぱに知るのにも適している。

コンピューターに関する本、それも「理論書」と聞くと、それだけで読む気がなくなる人も多いであろう。コンピューターに関する本、特にマニュアル類は、読みにくいのが通常である。しかし、この本の場合、アメリカ人の著者が会話調の日本語で書いており、非常に読みやすい。日英の翻訳者としても活躍する著者はこの本をすべて日本語で書いた。それだけでも驚くに値するが、著者のサリバン氏は、電話で話すと日本人と間違えるほどの日本語の達人であるようだ。

以下、章ごとに内容を紹介する。

第1章「インターネットはこうして生まれた：インターネットの過去と未来を考える」では、インターネットが軍や大学など一部の限られた人たちのものから一般へと普及していった歴史を概説している。

第2章「世間の非常識がウェブの常識：インターネットと人間の深い関係」は、英語教師にとって大変興味深い章であろう。ここでは、インターネットにおける言語使用と匿名性に焦点をあてている。著者は、アメリカ生まれのインターネットでも、アメリカ英語にこだわる必要がなく、自由に英語（あるいはその他の言語）を自由に使うてよいと言う。また、「.com」などのドメイン・ネームで判断すると、サーバーの約6割がアメリカにあることになるが、実際には、多くのサーバーはコンテンツを国内に置いている。そのため、サーバーの国家匿名性が増している。そして、新聞など既存のメディアが国家性から抜け出しにくい

のに対し、インターネットは国籍を意識せず楽しむことができると言う。

第3章「くたばれ、ネチケツポリス! : ネチケツの起源と意味」ではネチケツ(インターネットのエチケツ)とその歴史を簡単に紹介し、ネチケツは絶対的ではなく、ネチケツに違反することをあまりおそれず、気軽にインターネットを楽しむべきだと論じている。

第4章「リアルタイムの人間模様: チャットを楽しむノウハウあれこれ」ではチャットの仕組み、楽しみ方やその可能性を論じている。著者は、活字だけで単純そうなチャットこそが、最もVirtualな体験の可能性に満ちており、さまざまな性格や嗜好を「試着」できる領域だとしている。

第5章「[現実]とのつきあい方: バーチャル・リアリティーをとらえなおす」では、バーチャル・リアリティー(VR)の可能性や展望を論じ、VRの最先端技術が飛行機シミュレーションや「たまごっち」等のゲームに応用されている事を紹介している。

コンピューターや語学には頭の柔軟性が必要である。この本全体を通して、著者は既成の概念にとらわれない自由で柔軟な発想の持ち主であることがわかる。それは、特に、著者の言語観とコンピューター観によく現れている。私は、著者が語学(日本語)とコンピューターに優れているのは、自由で柔軟な発想を持っているからだと感じた。著者のそのような点を学ぶ意味でも、英語教師にとって一読に値する本である。

ESSAY

Time, Space and *Wasei-eigo*

Daniel Long
Japanese Language Research Center,
Osaka Shoin Women's College

When are *wasei-eigo* not, as the name indicates, made in Japan? As a topic of the study of Asian Englishes, I have been interested in language contact between English and other Asian languages, particularly in the form of lexical borrowing. *Wasei-eigo* are an intriguing phenomenon, because they indicate that English borrowings have permeated the Japanese language to such an extent that they become the basis for new and productive formations. In this way, *wasei-eigo* testify to both the malleability of English and the creative vitality of Japanese.

But in language, things are not always as they would appear to be. English is a diverse group of language varieties, and this variation

exists across the dimensions of both time (diachronic variation) and space (synchronic variation). Before labeling a certain lexical item as *wasei-eigo*, we must first tackle the challenging task of determining whether the word was used in English anywhere and at any time.

Two words which are often given as examples of *wasei-eigo* are *sutoobu* (meaning "heater", from English *stove*) and *manshon* (meaning "condominium" from English *mansion*). These words do indeed differ semantically in their most common Japanese and English usages, but were these semantic changes made in Japan?

While it is true that the principal referent of *stove* in current English is an apparatus for cooking food, rather than for heating a room, for centuries these two objectives were attained using a single device. It is the latter meaning which was retained in Japanese, while the former dominates in modern-day English. Thus, the word has undergone a significant semantic reduction in its original English form, while in its borrowed Japanese form an old meaning has been fossilized. Clearly then, *sutoobu* is not a Japanese creation at all, but an anomaly created by English variation across the dimension of time.

Another dimension with which linguists must deal is space. Even if we limit the scope of our discussion to only those places where English is used as a dominant home language, we still have to deal with enormous geographical variation as English sprawls across three continents.

Although often listed as a typical example of *wasei-eigo*, the usage of *mansion* in the names of multiple-resident dwellings is not uncommon in British English. UK dictionaries, including the OED2, do indeed list this meaning, and a recent query by this author to an email list for linguists yielded many confirmations from people in the UK of the currency of the term. The Japanese usage of *manshon* then, although admittedly strange to the American ear, is not a "made in Japan" semantic change.

Sutoobu and *manshon* are merely two examples, but thorough, methodical, and empirical research on *wasei-eigo* will likely reveal more examples of words which, while mislabeled as "made in Japan", actually existed previously within the complex matrix of English time and space.

《 事務局 から 》

1月31日の第2回全国大会において、第1回総会が開かれました。総会で話された議題は、以下の通りです。

1. 学会への名称変更

会員からの要請、また学術団体として本格的な研究をするためにも、昨年12月に会の名称を研究会から学会に変更しました。

2. 理事会への名称変更

学会に名称が変更したことにとともに、運営委員を理事に名称変更いたしました。理事は、運営委員会の委員をあて、委員長を理事長として会の代表をお願いすることにしました。理事は選挙によって選出することになりました。

3. 新理事の紹介

学会への名称変更後、理事の役割分担も大きくなりましたので、新たに3名の方に理事に加わっていただきました。その3名は、藤田剛正氏(長崎大学)、加藤三保子氏(豊橋技術科学大学)、大城浩氏(沖縄教育庁)です。

4. 会則案の承認

会則案が会則として承認されました。

5. 会計年度および会計報告

会計年度は4月1日より翌年3月31日までとし、会計報告は毎年夏の全国大会で行います。初年度の会計報告は第3回全国大会で行います。

6. 紀要の発行

会の名称が学会に変更されたことで、『アジア英語研究』(Asian English Studies)という日英バイリンガルの紀要を出す予定です。

7. 国際会議の主催

会員からの要請もあり、時宜をはかって主催したいと考えております。

8. ニュースレターの発行

ニュースレターは年2回発行予定です。第1号は昨年10月に発行・送付いたしました。

9. ホームページ

青山学院大学のページを閉じ、アルクの方のみ継続していくことにしました。URLは、<http://www.alc.co.jp/jafae/>です。

10. 第3回全国大会の開催

第3回全国大会は、白百合女子大学(東京)で6月27日(土)に行います。(大会実行委員長は、同大学 高本裕迅)

他学会からのお知らせ

The Third Regional Conference on English in Southeast Asia

1998年11月24から26日までブルネイのUniversiti Brunei Darussalam で開催予定。研究発表のabstractは7月15日〆切。詳細は、Prof. Gary Jonesまで。

Fax: 673-02-421528

E-mail: gmjones@ubd.edu.bn

英語音声学会主催 「日韓合同英語音声サミット」 研究発表募集 (使用言語は英語)

日時: 1998年7月26日(日)

場所: 愛知学院大学(名古屋市日進町)

目的: アジアにおける英語を、韓国の著名な音声学者とともに、音声面から、また、英語教育の面から論じ合う。ソウル大学を中心に韓国から10数名の音声学者、小学校英語教育者が来日予定。

問い合わせ先: 英語音声学会本部

愛知学院大学 都築研究室

FAX: 05617-3-1860

* 第3回全国大会 * * 研究発表募集 *

第3回全国大会は、1998年6月27日(土)に白百合女子大学(東京)にて行います。前回同様、発表20分、質疑応答10分の形式で研究発表を4本予定しております。大会テーマは、「アジア英語研究の最前線」です。研究発表希望の方は、5月6日(必着)までに要旨(日英どちらか)をA4 1枚にまとめて事務局までお送り下さい。

〈大会プログラム(予定)〉

- 9:30 受付
- 10:00 開会の辞
- 10:20 特別講演
藤田剛正(常葉学園大学)
- 11:40 総会(その後、昼食休憩)
- 1:00 研究発表
- 3:00 シンポジウム
「アジア英語研究の最前線」
本名信行(青山学院大学)
田嶋ティナ宏子(白百合女子大学)
竹下裕子(東洋英和女学院大学)
エリック・ベレント(清泉女子大学)
- 5:00 閉会の辞
- 5:30 懇親会

(上記プログラムは予定です。5月中に会員各位に正式なプログラムをお送りします。)

1998年4月10日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 高本裕迅

発行所 青山学院大学

国際政治経済学部

事務局 本名信行研究室内

〒150-8366

東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL: 03-3409-8111(代)

FAX: 03-5485-0782

E-MAIL: honna@sipeb.aoyama.ac.jp